

ハケってなんですか？ 武蔵野台地と水から紐解く人 の暮らしはどうみえますか？

2018.12.7 (金) 19:00-21:00

東京学芸大図書館カフェ note cafe

一般 ¥1500 / 学生 ¥500

1ドリンク付き

3万年の時間をふりかえりながら、一緒に考えましょう

トークゲスト

水越てるみ 国分寺市民団体ミズモリ団

足立とも与 東京学芸大学学生

ファシリテーター

椿真智子 東京学芸大学教授

「ハケ」ということを意識したことがある人は、どれくらいいるのだろうか。刷毛ではない、ハケである。もちろんハゲでもない。

ハケは、多摩川に沿って形成された国分寺崖線の小金井地域の呼び名である。いやそれでは少々難しく、また不正確でもある。古代から流れ続けている多摩川の水の流れによって、両側に自然にできた崖というか、丘というか、タモリ先生ならば「河岸段丘」とおっしゃるものがハケである。一般名詞でもあり、日本の各地にこうした地名があるそうだが、小金井・国分寺地域では、おもに小金井で使われていて、国分寺ではあまり使われないうだ。その代わり、国分寺では、国分寺崖線という言葉が使われているという。こちらの方が正式名称で、立川市から世田谷区の方まで続いている、多摩川の河岸段丘を指す。

国分寺のミズモリ団（水守りというのは、なんだか神話的で良い名前だと思う）の水越さんは、ハケの上と下の水のつながりに注目されていた。ハケの上の武蔵野台地は、江戸時代に作られた玉川上水によって開発が進んだ。ここまではご存知の方も多かるうが、多摩川から取られた水が玉川上水に流れ込み、さらにそこから多くの用水、分水が網の目のように武蔵野台地の上に張り巡らされていたことに思いを馳せる人は、あまりいないのではなかるうか。小川村分水、国分寺村分水、平兵衛新田分水、小金井新田分水、梶野新田分水・・・と、水越さんが示してくれた水のネットワーク図は、息をのむほど見事なものであった。そしてこれらの水は、やがてハケを下って野川に流れ込み、再び多摩川に戻るのである。そこには多摩川から多摩川へという水の循環があったのだ。だが同時に水越さんは、用がなくなった用水はドブ川になるという、悲しい話もされていた。

水越さんの話が、江戸時代の日本人の精緻な構造物と自然との関係についてであったのに対し、足立さんの話は、多摩川と人間の三万年にわたる関係についてであった。「ハケの考古学」というタイトルの話は、小金井でもめったに聞けないのではないだろうか。学芸大で考古学を専攻している足立さんによれば（学芸大に考古学研究室があるということをご存知か？）、すでに旧石器時代から、ハケの近辺に人が住んでいたのである。いや、書き方を間違えた。そもそも旧石器時代には人は一か所に定住することはなかったそうだ。臨時の根拠地であった遺跡では、狩りに備えて石器などを使っていたらしい。ハケの上が選ばれるのは、崖上なので遠くまでの見通しがよく、獲物を見つけたらすぐ出撃！ということが可能だからだそうだ。その意味で、水もあり台地もあるハケの辺りは、旧石器時代の人にも良い所だったのだね。その後古墳時代にはハケに横穴式の墓が作られたり、さらに時代が下ればご存知の国府や国分寺が造られたりする。中世にはこの地形を利用して、城も造られたそうだ。深大寺城というのを初めて知ったが、「縄張り」を見ると、うまい具合に崖と川を利用して、攻めにくく、守りやすそうな城ができていた。

ハケに関わる人の営みは、あまりに多様で、目がクラクラするようだ。この日はその一端に触れたわけだが、思うにハケは人間の智慧と文化を生み出す揺り籠のようなものではなからうか。そんなことを考えながら、散会したのであった。

藤井健志

東京学芸大学教授・元副学長

まちのカルチャーカフェ主宰・マスター

東京学芸大図書館カフェnote cafe発起人